

実践報告

2022・2023 年度 大学と地域が紡ぐ 親と子の絆づくり&学習支援 — ともいきひろば —

飯 田 令 子

1. 研究の経緯

平成 26 年度 10 月より大学 COC 事業地域志向教育研究「ともいき研究」をスタートさせ、令和 2 年度末で 7 年のともいき研究を終えた。スタート時は隔週の月曜日を基本として行っていたが、平成 28 年度より毎週とし、午後 4 時 30 分から午後 6 時まで「子供学習支援プロジェクト」を、午後 6 時から午後 6 時 40 分まで「つながりひろば(子供食堂)」を開設してきた。「つながりひろば(子供食堂)」の後には、午後 7 時 45 分まで中学生を対象とした学習支援を行ってきた。本学習支援プロジェクトは、参加を希望する子供に広く開放しており、小学生のみならず中学生も対象としてきた。保護者の子育て相談についても、実証的研究の効果も大きいものであった。

令和元年度より「子供学習支援」と「つながりひろば」を融合させ、「子供元気プロジェクト」として学生スタッフが計画する「子供が元気になる遊び」も積極的に取り入れた。特に、学生スタッフの意気込みが参加する子供の心を捉え、笑顔を引き出してきたと言える。本研究では、一般社団法人マキシマネットワーク、特定非営利活動法人まきしま絆の会、宇治市と本大学が連携し合い、本研究(以下、子育て支援プロジェクト)を積極的に推進していくことで、保護者の不安感を取り除き、地域の子供同士が

関わり合う機会を提供するとともに、子供への学習支援と保護者同士のつながりを促進させ、親子の心の絆づくりに貢献してきた。

令和 3 年度は、新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、リオス会場の使用が困難になった。そこで、学生が大学のパソコンやタブレットを使用して、大学から自宅にいる小中学生とオンラインでつながりながら学習支援を続けた。

令和 4 年度 5 月から令和 6 年 3 月まで、対面実施により、大学の講義室において学習支援及び子供の居場所としての「ともいきひろば」を実施している。

2. 研究の目的

子供の貧困問題、保護者の子育て支援、保護者同士のつながりの促進、親子の絆づくりを研究の目的とする。

1. 学習支援教室において、下校後の児童と関わりながら臨床心理学的な視点から子供理解を深めるとともに、学習支援の在り方を検証する。
2. 宇治市、地域協力者と本大学の連携による子供学習支援が、参加する子供やその保護者に対してどのような波及効果を与えているかを検証する。
3. 小学校教員を目指す教育福祉心理学科・

こども教育学科のゼミ学生や臨床心理士を目指す臨床心理学科の学生を中心とした学生スタッフが、子供理解について学びながら、子供の放課後の居場所づくりと個のニーズに応じた学習支援方法の在り方を構築する。

4. 子供学習支援教室において、教員、学生の専門性を生かした学習支援による社会的意義を実証する。
5. 学習支援教室における子供同士の関わり、親子の関わりの視点から検証する。

3. 研究の方法

- ・これまでの本学COC事業地域志向教育研究を継承・発展させるにあたり、宇治市、並びに本大学の研究者による組織の確認や「子育て支援」「子供への学習支援」の在り方について検討する。
地域協力者により新たな協力者募集及び参加者募集（小・中学生）を行う。（4月中旬～随時）
- ・1～4回生の教育福祉心理学科・こども教育学科学生に広く研究の趣旨や取り組みについて広報する。（4・5月）
- ・学習支援を行う学生に本事業の目的について説明し、学習支援についての工夫を引き出すようにする。（4月）
- ・研究役員、協力を得た地域住民と研究の目的、内容、運営について共通理解を図るとともに、活動を開始する。（4月から）
- ・地域の小学生対象イベントを企画・実施し、学習支援へのPRと学生スタッフへの広報を行う。（4月・9月）
- ・2023年度の申請書に基づいた「研究経費の予算執行」について、新組織の研究分担者で共通理解を図る。（4月）

- ・参加児童生徒、保護者、学生スタッフへのアンケート（8月・2月）を実施すると共に、地域協力者からの意見聴取を行う。アンケート調査に当たっては、本研究の主旨及び目的を冒頭で示し、回答をもって本研究への参加の承諾を得る。

（9月・2月）

- ・子供の学習支援に必要な教材等の準備物等（学習必要品）を確認する。

（5月初旬までに）

- ・先進的な取組について、情報交流を行う。

（4月中旬～随時）

- ・近隣小学校・小中学校の保護者に対し「学習支援“ともいきひろば”」を広報する。

（4月中旬～随時）

- ・子供への学習支援、親への子育て相談を行う。

（4月中旬～随時）

- ・子供への学習支援、親への子育て相談の成果と課題について検討し、次年度の計画実施案を作成する。（2～3月）

4. 具体的な取組み

(1)ともいきひろば（学習支援）

会場：京都文教大学 講義室（普照館306教室）

実施期間：令和4年4月～令和6年3月

実施日：第1～第4水曜日16:30～18:00

実施回数：41回

学習内容：学校の宿題プリント、テストの復習、テスト対策、ドリルなどによる復習知育玩具やカードを使ったゲーム、カルタなどの遊び

参加者の延べ人数：

延べ人数（2022年度）325名

（2023年度）359名

小学生

2022 年度	10 名	京都市立向島藤の木小学校 京都市立向島秀蓮小中学校 宇治市立北横島小学校 宇治市立横島小学校
2023 年度	6 名	京都市立向島藤の木小学校 宇治市立北横島小学校 宇治市立横島小学校

中学生

2022 年度	9 名	京都市立向島秀蓮小中学校 宇治市立横島中学校 宇治市立宇治中学校
2023 年度	8 名	京都市立向島秀蓮小中学校 宇治市立横島中学校 宇治市立宇治中学校

学生スタッフ

2022 年度

教育福祉心理学科 4 回生 8 名

こども教育学科 1 回生 5 名 3 回生 3 名

総合社会学科 3 回生 1 名

2023 年度

こども教育学科 1 回生 12 名 2 回生 5 名 3 回生 4 名 4 回生 5 名

総合社会学科 4 回生 1 名

地域スタッフ 3 名

* 学習支援及びイベント参加児童生徒は、スクールバスの利用可。地域スタッフによるバス利用支援あり

* 小学生は保護者の送迎を原則とする。(自家用車の駐車可)

* 中学生は自転車での来学可能。

* 参加者は保険加入

(2) スポーツイベント

【第 1 回 春のスポーツフェスタ】

日時：2022 年 4 月 29 日 10:00 ~ 12:00

場所：京都文教大学西体育館

内容：鬼ごっこ、玉投げ、リレー、大縄跳び など

対象：小学生（2～6 年生）

広報：地域スタッフにより近隣小学校へ広報
FRO よりかつてのイベント参加者へのメールによる広報 など

参加児童：25 名 保護者の参観あり消毒、
扉の開放、扇風機の使用など感染
対策を十分行い実施。

成果と課題：

- ・ 学生スタッフと学習支援参加者募集を目的に実施した。
- ・ できるだけ学生主体で計画し、企画から実施までの助言を担当者で行った。

学習支援

子育て相談

ともいひろばー

in 京都文教大学

小学生のみならず
大学生と一緒に楽しく勉強しませんか?
(2022年度参加者を募集中!)

「学校の宿題がむずかしい...」「勉強の仕方が分からない...」とお悩みの小中学生の皆さん。京都文教大学「ともいひろばーチーム」の大学生と一緒に、こつこつ楽しく学習しませんか。
宿題のサポートや試験対策など、学習の支援をします! 大学に来ることが困難な場合は、zoomミーティングにて学習支援を行います。

日時: 毎週水曜日 16:40-18:00 (第5水曜日は休み/夏期・冬期休校期間除く)
場所: 京都文教大学(〒611-0041 京都府宇治市横島千足80)

※オンライン参加希望者は「Zoom」よりご参加ください。
※新型コロナウイルス感染状況によってオンライン開催のみの場合もあります。

参加: 無料 (初回参加時に、保険料500円を徴収します)
内容: 宿題・学習サポート 子育て相談
募集: 10名程度(定員に達するまで、年度中は申込みを受付しています。)
備考: 大学までは保護者の方がお子さんを送迎ください。
※夏季の頃はスクールバス(宇治市立向島秀蓮小中学校)をご利用いただけます。
※お申し込みの一回限りです。

参加方法: 記載のQRコードからお申込みください

お問い合わせ
京都文教大学・短期大学 社会連携部
フィールドリサーチオフィス
TEL: 0774-25-2830 受付日9:00-17:00
MAIL: tri@bun.kyu.ac.jp

主催: 京都文教大学「大学と地域が紡ぐ親と子の絆づくり&学習支援 ともいひろばー」

春のスポーツフェスタ 第3回 参加費無料 先着30人 in 京都文教大学

暖かくなり体を動かす、いい季節になりました。大学生と一緒に遊びませんか？ 友達や兄弟でのご参加も大歓迎です！ たくさんのご応募お待ちしております！ ※対象：小学2年生～小学6年生(小学2年生以上の兄弟姉妹の同時参加の場合、小学1年生も参加可能です！)

ボール遊びや、鬼ごっこで 大生と遊ぼう！ 体育館シューズを持ってきてね！

※会場まで、保護者の送迎が必要です。(保護者の参観可、また別途保護者用控え室も用意しています。)

参加方法 下のQRコードを読み取り、Googleフォームにてご応募ください。受付は先着順とさせていただきます。

アクセス方法 ●近鉄京都線「向島」駅下車、本学無料スクールバスで約5分 ●「向島」駅より徒歩20分

開催日 2023年5月27日午前10時～正午頃(土)雨天決行

場所 京都文教大学 体育館 持ち物 体育館シューズ・お茶・タオル等

※本学での参加には由緒がございます。公共交通機関・本学スクールバス(本学ホームページに掲載済み)・自転車等のご利用ください。新型コロナウイルス感染症状況によっては、急遽、延期・中止する場合があります。なお、当日はご自宅での検温いただき、マスクを着用の上、ご参加ください。(当日、受付にて体温・アルコール消毒を行います。37.5度以上の方はご参加をお断りしております。)

※【問い合わせ】京都文教大学・短期大学ワイルドリサーチオフィス(0774-25-2630 / fro@pa.kbuu.ac.jp)

主催：京都文教大学 地域協働教育研究 (研究代表者 京都文教大学こども教育学部 藤田幸子) 協賛：地域と結びつく子どもたちのつくり・子どもへの学習支援と伝達場所 後援：宇治市教育委員会 (協賛中)

- ・初めての取組みであったため子供たちの安全を最優先にすることと、学生スタッフとして初めて参加した1回生にも子供と関わる機会を多くもつよう配慮した。
- ・見通しを持ち、計画的に進めることや役割分担を明確にして実施する経験にはなったが、学生にとってはとても大変なことでも課題が残った。

【第2回 秋のスポーツフェスタ】

日時：2022年11月23日13:30～16:00

場所：京都文教大学西体育館

内容：玉入れ、リレー、大縄跳び など

対象：小学生(1～6年生)

広報：地域スタッフにより近隣小学校へ広報
FROよりかつてのイベント参加者へのメールによる広報 など

参加児童：16名 保護者の参観あり消毒、
扉の開放、扇風機の使用など感染対策を十分行い実施。

成果と課題：

- ・すでに一度経験しているので、学生としてはイメージを持つことができているが、子供たちに競技の説明をするとなると、とても段取りが難しく、練習の必要性を実感した。
- ・役割分担を明確にして、子供が楽しむ競技を考えることができるようになってきた。



【第3回 春のスポーツフェスタ】

日時：2023年年5月27日10:00～12:00

場所：京都文教大学西体育館

主な内容：玉入れ・綱引き・リレー

対象：小学生(2～6年生)

広報：地域スタッフにより近隣小学校へ広報
FROよりメールによる広報 など

参加児童：25名 保護者の参観あり

*消毒、扉の開放、扇風機の使用など感染対策を十分行い実施。



成果と課題：

- ・各競技の企画・運営を2年生中心に実施したところ、学生にとってはよい経験、学びになった。
- 特に、安全を考慮して子供たちが楽しめる競技や遊びを考えることは難しかったが、大きな事故もなく子供たちは十分に楽しんでいる様子であった。
- ・学生が一人一人の子供に対して丁寧に接する姿を保護者の方からも評価していただくことができた。
- ・高学年児童の欠席が目立ったが、学生が援助するなど臨機応変に対応することで活動を十分楽しむことができた。

【第4回 冬のスポーツフェスタ】

日時：2024年2月3日 10:00～12:00

場所：京都文教大学西体育館

内容：借り物競争・言葉集め・ポートボール

対象：小学生（2～6年生）

広報：地域スタッフにより近隣小学校へ広報

FROよりメールによる広報 など

参加児童：16名 保護者の参観あり

＊消毒、扉の開放、扇風機の使用など感染対策を十分行い実施。

成果と課題：

- ・受付時にチーム分けとビブスの配布にミスがあり時間のロスがあったため、子供を待たせることになったが、一人一人の子供に丁寧に関わる学生の姿があり、参観の保護者からも認めていただくことができた。
- ・学生の中に、「学習」という要素を入れる意識が高いために、かえって体を動かす活動が少なくなったという課題が残った。
- ・回を重ねることで学生スタッフに見通しがもてるようになり、ゆとりをもって準備ができた。



(3)その他 夏休み工作教室，理科ゼミの学生による科学教室

夏休みには小学生向けに工作教室を実施した。2022年度は貯金箱，2023年度は段ボールガチャガチャを制作。小学生は夏休みの提出課題として創意工夫を凝らした作品作りを楽しんでいた。学生は，子供たちが楽しんで活動するためには，先の見通しをもって計画的に実施すること，そのためには試作や準備，広報をしっかりとる必要があることを経験を通して学ぶことができた。

一方，2023年8月に中学生対象の進路座談会を実施したところ，中学生にとっては日常の学習支援で大学生と関わるだけでなく，自分の将来の姿をイメージすることにつながったという声があった。「ともいきひろば」の活動を通して子供たちに縦のつながりを見ることができた。

理科ゼミ学生による科学実験教室は年間2回実施している。テーマは，「宝石みつけにちょうせん+川のぼうさいをしよう」（6月）「化石ほり+化石づくり」（11月）で宇治市，京都市の近隣の小学校から子供と保護者が参加している。毎回，キャンセル待ちが出るほど子供たちは楽しんで取り組んでいる。

(4)広報の方法

地域協力者及び学生による近隣の小学校へのチラシ配布依頼

大学ホームページ

大学からのメール配信（ともいきフェスティバル参加者）

イベント（ともいきフェスティバル）時のチラシ配布

5. 研究成果と課題（2022年度～2023年度）

【成果】

(1) 臨床教育学的視点から，学生が子供理解を深め学習支援の在り方を模索するための環境設定

学生にとっては，継続的に子供と関わることでコミュニケーション力，子供の思いに寄り添い思い願いを生かすことの大切さやその方法を学ぶことができ，指導力を高めることにもつながった。

今後，教員を目指す学生にとって，放課後の子供の実態を見ることは，子供理解の上で非常に有意義なものになった。（資料1）

オンライン実施では，児童生徒がもっている宿題プリントなどを写真で共有するため，細部まで見えなかったり，対面に比べて説明が難し



かったりするという課題があったが、ロイロノートを活用することでその問題が多少軽減された。また、何らかのアプリが多くの小・中学校で活用されているため、学生にとっても活用方法を学ぶ機会となった。

複数の小・中学校から異なる学年の子供たちが参加しているため、それぞれの使用教科書を購入することで、学生が教材研究をし、指導法を身に付けることにもつながった。

(2) 参加する子供やその保護者に対する波及効果（児童生徒アンケートより）

児童生徒は、「学校の進度に合わせて復習や予習をするようになった」「休まず参加しようと思う」など、態度や意欲の向上が見られる感想が寄せられた。また、「話をするのが上手になった」「学校以外の友達ができた」については、児童生徒間や学生との交流により、参加することが楽しくなっている様子がうかがえる。（資料1）

(3) 学生スタッフにとっての学び（学生スタッフアンケートより）

子供と関わることによって教師として求められる力に気付くと共に、自らの学力、指導力やコミュニケーション力を把握することができた。また、地域協力者や保護者と話したり子供の思いを聞き取ったりする機会を得て、子供理解や指導に生かすことができると考えられる。放課後の子供の様子や思い・願いを把握することは教員になってからも生かされるであろう。異なる回生・学部が同じ目的に向かって協力する機会を設定できたことを本取組の魅力と捉えている学生もいた。

一方で、より学習支援の質を上げるために、予習や課題用プリントを作成して学習支援に臨んでいる学生もいる。学生の意識が高くなり、

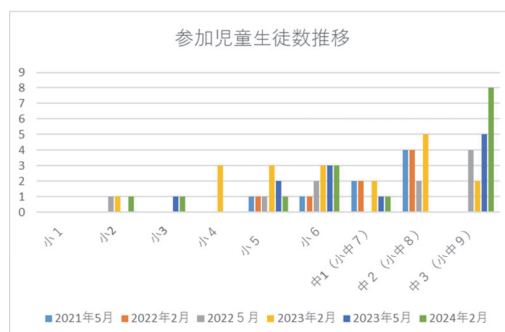
子供たちに課題を見出したり指導の仕方を工夫したりする力がついていると言える。プリント印刷費を学生が負担することがなく、活動をより円滑に活発に行うことができるように、「ともいきひろば」で印刷用プリントカードを所有できるように考えていきたい。

理科ゼミの科学実験教室では、児童・生徒への指導・支援をすべてゼミの学生が行いゼミの時間を使って準備をすることができた。これは学生の指導力を高めることにもつながったと言えるだろう。（資料2）

(4) 学習支援による社会的意義

放課後の学習支援への参加者は増加している。要因としては、対面での実施が可能になり学生と子供との望ましい関わりがもてるようになったことも考えられるが、地域協力者の尽力と共に、子供や保護者が取り組みのよさを実感して口コミで他の友達にも広げることができている。特に中学3年生の生徒が増えたのは、1名の生徒から次々友達に広がり、6名もの友達に参加することになった。

学習支援やスポーツイベントへの参加を通して、子供たちは社会性を身に付け自己コントロールの力を発揮していることが考えられる。日によっては対応できる学生の人数が少なかったり、いつもと異なるグループでの学習を余儀なくされたりすることもあるが、子供なりに対



応力を身に付けているように見える。大学の行事や第5水曜日などでともいきひろばが実施できないと、とても残念だと言う子供がいることから、生活リズム作りにもつながっていると考えられる。

2023年度は新型コロナウイルスへの対応が5類相当になったことと共に、小学生時代から続けてきた中学生が受験期になり、次々、友達を引き込んで参加者が急増した。塾のようにひたすら学習するわけでも、また、おしゃべりや遊びのみというわけでもない「ともいきひろば」は、まさに中学生にとっての「居場所」となり、様々な学生から進路や高校生活についての話を聞く姿が見られた。

(5) 子供同士の関わり、親子の関わり等の意義

保護者の中には、送迎のために子供と同じ時間を同じ講義室で過ごすことがある。保護者同士のコミュニケーションや教員との関わりから、子供の成長を見取り、子育てについての情報交換や子育て相談をしたりすることができる。アンケート調査（5名）では、保護者全員が「安心・安全な居場所となっている」と回答し、家庭でもともいきひろばでの出来事を話す子供の姿を認めている保護者もいた。

また、子供は学生と適切なコミュニケーションを図ったり、他校の友達と一緒に遊んだりする機会を得て、関わる力を身に付けることができている。参加者へのアンケート調査（9名・8月実施）には、「休まず参加しようと思う」「学校以外の友達ができた」などと答え、関わりを楽しむ子供の姿が見られる。地域協力者は小学校等に出向いて、取組みの広報をするだけでなく、地域での子供たちへの声掛けを欠かさず、地域の中で子供が見守られ育てられるという環境と安心感をつくることに役立っている。

【課題】

2022年度は、宇治市役所より横島地区の担当者からのアプローチがあり、連携の在り方を探った。子育て支援の観点からは、「ともいきひろば」（大学が会場）への保護者による送迎が困難な現状にあり実施場所や形態を模索したが、適切な対策が見いだせなかった。

2023年には、京都市立向島秀蓮小中学校から2名の先生が参観に来られた。第9学年の生徒が約7名参加していることと、「ともいきひろば」を担当してきた卒業生が同小中学校の教員となっているため、関心をもっていただくことができた。中学校での生徒の姿とは異なり、学習に向かったり、他の中学校の生徒と適切に関わったりしている生徒の姿を通して、取組みの価値を見出していただくことができた。小中学校の理解を得て、つながりを作ることはできたが、その後参加生徒を増やすことにはつながらなかった。

京都市、宇治市の近隣の小学校では、子供の実態や保護者のニーズがあり参加を希望されても、小学生については送迎が必須であることが大きなハードルになっていると考えられる。特に、秋になり日没が早くなると子供だけの帰宅は安全上認められない一方で、保護者としては仕事や家庭の事情で迎えが困難な実態がある。そのため、参加児童の増加が実現しないという現状がある。宇治市や保護者、児童の実態を把握してそれに応えられる対策を引き続き模索していきたい。

6. おわりに

研究の趣旨に照らしながら、できるだけ学生の主体性を重んじ、学生が責任をもって取り組む中で達成感を得られるようにしたいと考えてきた。授業のない長期休業期間でも、「ともい

きひろば（学習支援）」のために2時間もかけて来学する学生がいることを捉えると、学生が責任感や取組みに対する手ごたえを感じていると受け止められる。悪天候などで急に学習支援ができなくなる非常に残念に思う中学生や大学生がいることから、参加児童生徒のみならず学生にとっても「望ましい居場所」になっていると考えられる。

小中学生の自宅から会場（大学）への行き来や交通手段などがうまく合わず、地域や保護者のニーズに応えきれないという現実がある一方で、続けて参加する子供たちはとても熱心で、年々やる気を見せている。このことは、学生や協力者の励みにもなっている。参加児童生徒の数と大学生スタッフの数のバランスがとても難しいのは悩みである。

また、2023 年度は冬のスポーツフェスタでは、保護者からの声を聞き取ったところ、とても前向きな回答を得ることができた。コロナ禍による消毒や競技の設定などに困難さを抱え、手間取る学生たちにも温かい目で見守る保護者の姿があった。厳しい中にも温かみのある回答からは、保護者や地域の「学生を育てたい」という思いを受けとめることができた。学習支援やスポーツフェスタの取組みを通して、学生の力が地域の助けとなればと考えるが、学生たちも子供たちや保護者、地域からの働きかけによって育ち励まされて力を付けていることを実感している。

次年度には、取組みを続ける中で参加している小・中学生や学生の意識の変容や、また、身に付いた力をより詳細に探ると共に、学習支援のあり方について深めていきたい。

* 「こども」の表記については、文脈上は「子供」、広報等については「子供」を使用している。

【研究分担者】

亀岡正睦（こども教育学部こども教育学科教授
＜2022・2023 年度＞

橋本祥夫（こども教育学部こども教育学科教授
＜2022・2023 年度＞

橋本京子（こども教育学部こども教育学科教授
＜2022 年度＞

鵜飼洋子（こども教育学部こども教育学科准教授
＜2023 年度＞

大前暁政（こども教育学部こども教育学科准教授
＜2022 年度＞

大前暁政（こども教育学部こども教育学科教授
＜2023 年度＞

寺田博幸（前ともいき研究代表者＜2022・2023 年度＞

畑智和（宇治市福祉こども部生活支援課長＜2022 年度＞

河田政章（宇治市福祉こども部地域福祉課長＜2023 年度＞

【研究協力者】

榎田尚美（地域協力者）＜2022・2023 年度＞

田和千夏地（地域協力者）＜2022・2023 年度＞

八木裕子（地域協力者）＜2023 年度＞

【協力学生】

こども教育学科・教育福祉心理学科・総合社会学科・臨床心理学科

【付記】

本研究は、京都文教大学地域協働研究教育センター「地域志向協働研究」助成において、＜2023 年度＞研究課題「大学と地域が紡ぐ親と子の絆づくり & 学習支援— ともいきひろば—」＜2023 年度＞研究課題「大学と地域が紡ぐ親と子の絆づくり & 学習支援— ともいきひろば II—」（研究代表者：飯田令子）として研究費を受け、その成果を公表するものである。

(資料1)

2023年度 設問：ともいきひろばに参加して、変わったことはありますか、(%)		
	9月	2月
計画的に学習するようになった	23.1	7.7
苦手なこともあきらめずに取り組むようになった	30.8	23.1
学習に取り組む時間が長くなった	53.8	23.1
分からないことをそのままにしないように努力している	38.5	30.8
ノートを分かりやすく書けるようになった	23.1	7.7
自分で課題を見付けて学習するようになった	7.7	7.7
読書時間が増えた	7.7	7.7
話をするのが上手になった	15.4	23.1
テストの点数が気になるようになった	53.8	38.5
学校の進度に合わせて復習や予習をするようになった	7.7	23.1
休まず参加しようと思う	38.5	46.2
規則的な生活習慣が身に付いた	15.4	7.7
進路に関心がもてた	23.1	15.4
積極的に人と関わるようになった	7.7	7.7
みんなと一緒に遊ぶ楽しさを感じることができた	38.5	30.8
学校以外の友達ができた	23.1	38.5
大学生と一緒に勉強したり遊んだり、話をしたりすることが楽しい	76.9	46.2

(資料2)

2024 年 2 月 「ともいきひろば」スタッフとして活動した学生からの感想

4 回生 A	<p>約 1 年間ともいきひろばのスタッフとして、活動してきて、色々な学年や学校のこどもたちと勉強して学習支援の仕方たくさんありこんな子にはこんな対応が合ってるなというのを学ぶことが出来て良かったです。人との関係については、僕はそこまで保護者の方々と関わることはなかったですが、子供たちや大学の後輩たちと普通の生活では出来ないような関係を築くことができたと思います。いるかいないかはちょっと分かりませんが、宿題をしたらはい終わり遊ぼう！となるのが、現状なのでちょっとした問題だったり考えれば誰でも解けるようなクイズ、パズル系のクイズをプリントでできるように、学生たちが作ったり持ってきたりできるように、ともいき用のパソコンアカウントとコピーのポイントが頂けたらもう少し、勉強と頭を使った運動のできる活動になるのではと思いました。</p>
4 回生 B	<p>いったんになるかもしれないけどありがとうございます！これからも顔出せる時は出そうと思うし僕は学生側を卒業したとしか思ってます。また長期休暇は友達を連れて顔出しますその時はまたお願いします！</p> <p>教育学部でなかった俺をここまで置いてもらってなんなら中心メンバーにしてもらいありがとうございます。</p>
4 回生 C	<p>大学生活をおくるなかで、授業とは別で子供と関わる機会を得られてとても充実した活動になったと思います。こどもと関わる経験を増やすことが出来たことはもちろん、責任を背負いながら何かに取り組むということが出来たことが特に充実した要因だと思っています。教師として社会に生きることは様々な責任と向き合うことが付きまといてきます。それだけこどもと関わるということは命を預かっているという立場であることだという認識をしている必要があるとこの活動を通して学びました。それは僕が最上級生として代表をさせて貰ったからこそより強くそれを思えるようになったので、感謝の気持ちでいっぱいです。なので後輩たちには漫然とこどもたちと関わるのではなく、この活動を通して子供たちにどうなって欲しいのか、そして自分自身がどのような考えを持って取り組むべきなのかを頭のどこかに置いておいて欲しいなと思っています。僕がこの活動に参加するときには、リオスがこども食堂の延長として行われてきた中での活動の意図というのは分からない状態でした。コロナ禍の影響を受けて地域のスタッフの方や参加児童の保護者の方々も分からないことだらけだったと思います。なので僕自身がこの活動を通して子供たちには心休まる場として捉えて欲しいなという思いがありました。学習支援が基本ですが何がなんでも学力をあげるということではなく、学校以外で勉強に触れる習慣を作りつつ、こどもたちに心許せる居場所としてあって欲しいと思っています。このようにこの活動の意図を考えることを大事にこれからも頑張って言って欲しいなと思っています。</p>

4 回生 D	<p>ともいきひろばに参加して半年ほどでしたが、主に中学生をみるが多かったです。始めはずっと話してばかりで勉強に集中していませんでしたが、少しずつ勉強する雰囲気になっていったのは良かったなと思います。中学生と関わることはほとんどないので新鮮で、学習支援をしていて子供との関わり方を学ぶことができました。教え方一つをとっても、理解できるような話し方をするにはどうすべきかを考えていくことが大切だなと思いました。毎週行くことができず、不真面目なところもありましたが、子供と楽しく過ごすことができている思い出になったなと思います。</p> <p>また、後輩とのつながりもできたので、本当に良かったです。ありがとうございました。</p>
4 回生 E	<p>交友関係も広がったことでより多くの視点から子供たちをみる事が出来ました。</p> <p>また、スポーツフェスタのようなイベントで、子供たちだけでなく保護者の方と色んなお話ができたのはとても貴重な経験だと感じています。</p> <p>イベントでは、子供たちだけでなく大学生を動かすという面でもそれぞれが成長出来る良い機会だと思いました。</p> <p>イベントだけでなく、他のことでも情報共有が少しきいていない場面もあったため、そこは今後の課題にもなってくると思いました。(リーダー同士だけでなく全体への共有も含め)</p> <p>学校現場に行くインターンやボランティアと違い、子供たちも大学生もリラックスして落ち着いて学習できる「ともいき」という環境はこれからも続いて欲しいなと思います。</p> <p>イベント大好きなので、社会人になってもまた呼んでいただける可能性があるのではぜひ参加させていただきたいなと勝手に思ってます！</p>